

ふるまいが生まれる場所 - 街に寄り添う風景となる建築 -

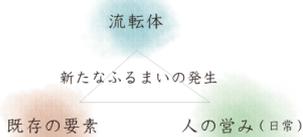
大藤美里
日本女子大学大学院宮研究室

1. 背景と目的

花見は、日本特有の無形文化であり、そこには自然と豊かなパブリックスペースが生まれている。無形文化は、私たちに普段とは違った人々との経験の共有、ふるまいの共有をもたらしてくれる。それによってできるのは、日常生活に必要な、緩やかにつながる人々との関係性である。

そこで本研究では、無形文化である祭りが持つ歴史的な時間の流れと空間の質の転換を利用し、日常にも豊かなふるまいを生む、街に寄り添う建築の在り方を提案する。

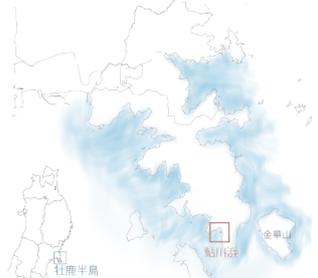
既存の要素が人々の暮らしの中で建築と結びついた時、そこには新たなふるまいの場が立ち現れる。



2. 対象敷地

敷地は宮城県石巻市鮎川浜。捕鯨・漁業・観光の町として賑わいのある町であったが、東日本大震災では甚大な被害を受け、当時の賑わいは失われてしまった。

鮎川浜には、昨年12年越しに復活を果たした、熊野神社の小さな祭りの存在があった。震災を経験した今だからこそ、祭りが持つ力によって、浜全体の結びつきを強くすることの必要性を、住民自身が感じたのである。



3. 敷地分析

鮎川浜において、日常に見られるふるまいと、祭りの日に現れるふるまいをそれぞれ採集した。

□日常にあるふるまい



□非日常（お祭り）の時に現れるふるまい



次に、街にある既存の要素を抽出し、地図上にプロットを行った。その結果から、要素を3つに分類することができた。



The place that behavior produces naturally

Misato Oto
Japan Women's University Miya Akiko's Laboratory

4. 設計

4-1. 全体プログラム

抽出した要素を元に、今敷地に潜んでいる既存のモノや人のふるまい、自然環境などと結びついて、新たな人々の関係性を生む建築を点在させ、祭りの新しいルートに組み込む。ケの日には、その場所特有のふるまいや人々の関わりを生み、点在させた建築が、部分としてそれぞれ成立する。ハレの日には、それを祭りのルートとして神輿が迎えることで、ひとつの大きな意味を持った全体として立ち現れ、普段の生活では起こらないような新しいふるまいを生んでいくシステムを提案する。



ハレの日：祭りのプログラムの中での建築

ケの日：既存の要素と結びつき、場と馴染んだ建築

4-2. 設計プロセス

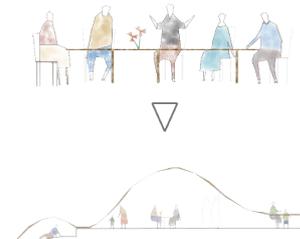
二つのリサーチの結果から、既存と結びつきながら、新しいふるまいを生む余地を見出すことができた場所を10箇所、提案敷地として設定した。また、それぞれの敷地において、地形・抽出した要素・自然環境・周辺住民の暮らしなどから、既存の環境を活かした形態・機能のスタディを行う。

4-3. 形態の抽出

東北地方に伝わる「お茶っこ」と呼ばれる文化を取り入れる。「お茶っこ」とは、近所の親しいおばあちゃんたちが「ちょっとお茶でも」と集い、テーブルを囲んで談笑をするコミュニケーションの場である。それは、震災以前、この鮎川浜でもよく見られた光景だった。鮎川浜に根付くこの習慣から着想を得て、この浜に「テーブル」を添えてみるどころから始まる。熊野神社の「テーブル」から始まった建築が、この土地にある要素と結びつくと、様々なふるまいを生みながら、新しい風景の一部となってこの浜に佇む。時に「庇」となって石垣に影を落とし、時に「テラス」となって人々のふるまいを外部に滲みださせ、時には「ワカメの干し場」として生業風景の一部となる。

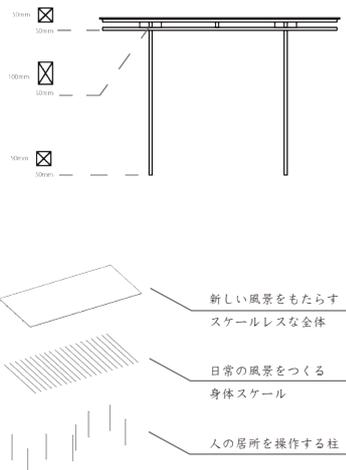


お茶っこの様子

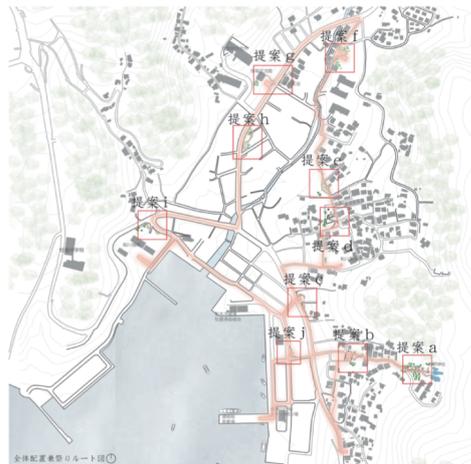


構造は木造で、50ミリメートル角の細い柱を二重の梁が支え、その上に10ミリメートル厚の薄い木板が滑らかに伸びる。鮎川浜の山を切り開いて公営住宅を建てる際に出た木材を利用し、柱や梁は地元の大工や漁師達によって建設が可能である。

柱の配置によって人の居所を操作し、梁には、ワカメを干したり漁業道具を吊るすなど、日常の風景が生まれる。既存の要素と結びつき地に馴染む、「部分」としてふるまいを生む場となる。一方、緩やかに、おおらかに浜全体に伸びる薄い木板は、スケールレスな「全体」として、浜に新たな風景をもたらす。

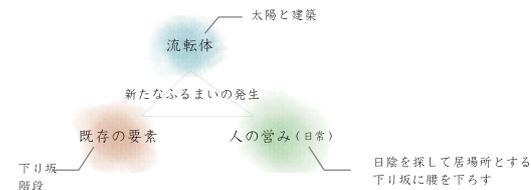


全体パース及び、全体配置図兼それらを組み込んだ新しい祭りのルート図を下に示す。ケの日には点在させた建築が、部分としてそれぞれ成立する。ハレの日には、それを祭りのルートとして神輿が辿ることで、ひとつの建築として立ち現れる。

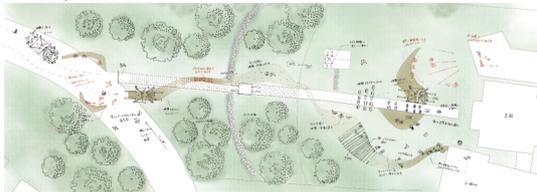


[提案 a : 熊野神社境内・鳥居前]

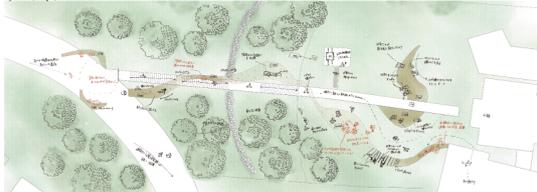
祭りのスタート / ゴール地点となっているのがこの熊野神社である。日陰に囲まれた下り坂にある鳥居の前は、祭りの日だけはみんなが下り坂に腰を下ろし、祭りの達成感を共有しており、自然と豊かなパブリックスペースが生まれていた。このような、文化的な時間の流れと結びつく時に発揮される場所のポテンシャルを利用し、建築を添えることで日常にも豊かなふるまいを発生させる。



ハレの日

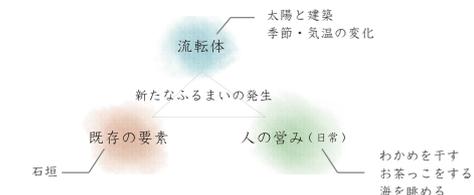


ケの日

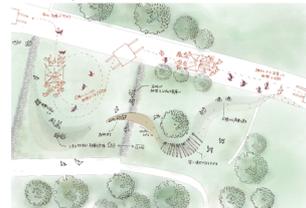


[提案 b : 宅地造成跡の石垣]

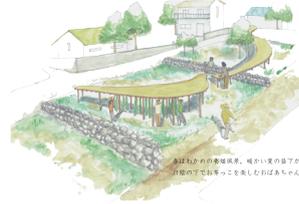
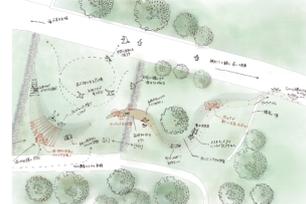
海と山に囲まれた自然豊かな鮎川浜は、宅地造成によってできた石垣が多く見られる。震災によって、石垣だけが取り残されてしまったこの風景に、石垣の段差や、強い西日を利用した新しいふるまいを起こす。周辺には、昔から鮎川に住んでいる住民も多く、またわかめ養殖の漁業所も近い。建築が土地に寄り添い、生活動線の延長による小さな人々の交流や、豊かな生業風景を生んでいく。



ハレの日

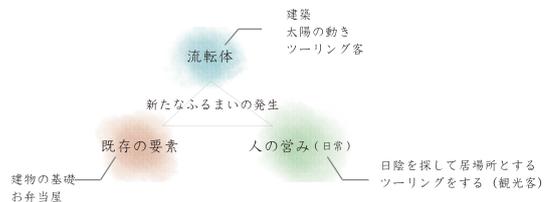


ケの日

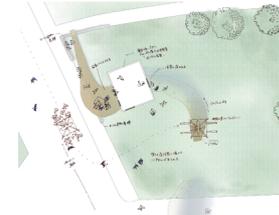


[提案 c : ぼっぼら食堂前]

ぼっぼら食堂は、震災後にできたお弁当屋である。震災後にできた、人の新しい活動の場と、震災によって取り残された建物の基礎が、柔らかく添えられた建築によって、この地に馴染む、新しいふるまいを生む場所となる。既存の建物にも建築が介入し、人々のふるまいを外部へと滲み出させ、新しい出会いを生む。



ハレの日



ケの日

